

雑誌『土曜日』グループにおける「反ファシズムの学習」

— 戦時下京都の抵抗メディアの「フレーム分析」に向けて —

吉 田 正 純

“Doyoubi” group and it’s anti-fascist learning:

Toward a Frame analysis of resistant media in Kyoto during the Second World War

Masazumi YOSHIDA

1 『土曜日』グループの「運動と学習」

1-1 先行研究と主題

本稿の目的は雑誌『土曜日』を中心に展開した「反ファシズム文化活動」を、近年の社会運動研究における「フレーム分析」の知見を援用して改めて「社会運動における学習」のプロセスとして析出することにある。『土曜日』は1936年7月から1937年11月に弾圧で途絶するまで月二回・計33号、中井正一・能勢克男らを編集者として京都で発行された全6面タブロイド版の雑誌（新聞）で、ユニークな「反ファシズム運動」の試みとして知られる。近年では「非常時」下の困難な政治局面での良心的な「ささやかな抵抗」としてだけでなく、「文化の政治」の再発見の中で大衆文化や日常生活を舞台とした運動としての読み直しがなされてきた（上野1999、北田2002等）。社会教育研究での山寄らの労作もまたこうした「文化の政治」への関心に呼応し、外面的な「抵抗」とは異なる価値意識に関わる「対抗文化創出」（山寄2002）を学習プロセスとして検討してきたといえる。また『土曜日』のルーツとなる京都の消費組合運動や『世界文化』の学習活動についての拙稿（吉田2003、吉田2004）もこうした関心を受けたものである。

こうした先行研究を踏まえつつ、本稿では中井ら「知識人」の思想的・理論的営為の分析にとどまらず、『土曜日』を媒介に諸個人・団体が多様に現実・運動を解釈する過程に注目する。この『土曜日』グループの人々のネットワークは統一した基調・路線よりもむしろ関心の多様性に特徴があり、当事者の理解をも超える豊富な多面的実践を内包する。それ故『土曜日』を開かれた社会運動ととらえ直すためには、中心メンバーの唱えた理論や方向性に収束するのではなく、様々な読者や協力者の「想い」や戦略が出会いせめぎ合う場として理解するのが適切であると考ええる。

さらにその分析枠組みは「理論／実践」「知識人／大衆」の指導（啓蒙）の図式ではなく、一定の自律性を持った諸運動の「多組織フィールド」としての相互作用の解析が不可欠であり、共有される「理念」も各々の参加者にとっての「意味づけ」が重要になる。この『土曜日』の

実践の多面性への関心はいくつか論及されてきたが（渡邊1976、高島1976、荒瀬1979等）、近年の研究は特に中井のテキストの「読み込み」に集中して他の当事者の回想や実践は補足かノイズとして無視される傾向もみられる。しかし参加者の「学習」に焦点を当てるときむしろこの「理念」との差異や距離感、またその解釈や認識変容こそが「学習課題」を決定付け、社会的な状況理解や運動への自己理解をうながす契機にもなると考える。ここでは次章で紹介する社会運動研究における「フレーム分析」の手法を援用し、運動が現実や自身をとらえる枠組み（フレーミング）の形成・変容や参加者によるそのフレームの調整・共鳴のプロセスとして「社会運動における学習」を再構成することを試みる¹⁾。

1-2 『土曜日』グループの多元的な性格

まず『土曜日』グループを背景も立場も異なるいくつかのグループ・運動が結びついたネットワーク、言い換えれば完結した「運動体」というより複数の「多組織フィールド multi-organizational field」が連動・競合して相互変容していく過程としてとらえたい。それは少なくとも次の三つの異なる源流をもつ運動が結びついているものと考えられ、それぞれが独自の「教育的活動」をグループにもたらしていたと見ることができる：

- ① 能勢克男らの消費組合運動・文化サークル活動……能勢は1929年に「京都家庭消費組合」で文化人や地域女性による消費組合運動を開始し、30年以降は貧困層や学生の消費組合が合流した「京都消費組合」の代表として活動した（36年に解散命令）。そこでは商品流通や生産のしくみの学習を通じた「消費者教育」の実験のほか、労働運動・無産運動や女性運動など多様な背景をもつ運動を結びつける経験も有していた。また（中井・新村も参加した）京都消費組合では地域の研究者や芸術家が活動に参加して「大衆とともに」運動を経験する場として機能し、『土曜日』グループの人と情報のネットワークの大きな基盤を形成したといえる（吉田2003、京都生活協同組合編1989等参照）。
- ② 新村猛らの『世界文化』の批評活動……しばしば『土曜日』と同一視される『世界文化』グループは前期（『土曜日』以前）を主導した真下信一らの旧グループに代わって、新村・久野収らが中心となり並行して『土曜日』と連動する形に変化していた。ねずまさしらの回想に現われるようにこの二誌は性格も人脈も異なるものだったが、『土曜日』の着想が『世界文化』編集会議での仏『ヴァンドルディ』誌の紹介に触発されたように、その思想的背骨を提供したことは間違いない。また独自の編集会議をもたなかった『土曜日』にとって『世界文化』の学習会での活発な討論が貴重な学習と交流の場であり、また「世界文化情報」欄をはじめ反ファシズム運動の「翻訳」が速報メディアと読者鼓舞の両面で『土曜日』を支えたことは言うまでもない。また逆に『世界文化』同人にとっては新村が「文化面」で仏人民戦線の「文化の家」等の活動を紹介し、久野が日中戦争下での中国民衆の姿を道するなど、「知識人」向けの批評にとどまらないジャーナリズム的な「大衆教育」を経験する貴重な経験となり、後の活動にも強い影響を与えたことが回想から伺われる。
- ③ 斎藤雷太郎ら『スタジオ通信』以来の活動……そして何より「読者が書く新聞」のビジョ

ンを掲げ、身近な題材を取り上げることから庶民を「自覚分子」に育てるための雑誌をめざしたのは、『土曜日』の前身である『京都スタジオ通信』を独力で発行していた大部屋俳優の斎藤雷太郎の活動であった。従来（伊藤（1978）など少数を除いて）副次的とされた斎藤の存在は創刊までだけでなく、数多くの映画産業の現場ルポである「ロケ・パス」などユーモアを交えた批判的なエッセーで「庶民の言葉」で語る実践を（時に能勢や中井との緊張を交えて）重ねてきた面でも異色な役割を果し続けた。さらに喫茶店での販売配布網や映画制作現場での配布など大衆的な読者層の開拓など従来の知識人「同人誌」では考えられなかった広がりや、（東京の『セルパン』の大衆版を目指したという）民衆の自己教育のための雑誌（に知識人も組み込むという）という明確な意図に裏打ちされていたと言える。このほか『土曜日』全体としては画家・デザイナー・小説家・映画関係者といった芸術・文化産業に関わる人々や新聞はじめメディア関係者に積極的に働きかけており、上記の「知識人」運動とは一線を画した人脈が存在した。

そしてこれらは中井正一らを軸にした人的結びつきによって、『土曜日』誌上での斎藤と能勢の「論争」に見られるように）緊張をはらんだ「討議」を経て運動を方向付けてきたということができる²⁾。

2 「フレーム分析」と学習論の節合

2-1 「社会運動と学習」研究における「フレーム分析」の意義

『土曜日』グループの学習的な活動を思想啓蒙活動としてだけでなく、自律的なネットワークによる「社会運動における学習」として分析するために、社会運動研究における「フレーム分析」のパスpekティブが参考になるとと思われる。「フレーム分析 frame analysis」は1980年代後半以降 D.A. Snow らによって提唱された方法論で、運動組織・リーダー等の提起する「解釈枠組み（フレーム）」への参加者の経験・理解を通じた「共鳴 resonance」によって運動への参加・動員を説明する。これは社会運動の発生過程における感情（不満）の説明にとどまらず進行過程での「集合的アイデンティティ」の形成や経験と行為志向性に導かれた認識変容に焦点を当てる点で、成人学習論ともすぐれて親和性を持つと考える。その中心的な概念である運動体／参加者による解釈パッケージとしての「フレーミング framing」は、自分たちが関係する出来事や状態を意味づけ説明するとともに、共有・提示することで支配的見方や他グループと自らを区別するものでもある³⁾。

2-2 「フレーム分析」の展開と学習論

この「フレーム分析」は1990年代以降社会運動論において「文化」概念への関心の高まりを牽引し、運動参加者による「運動文化」の生産・変容といったシンボリックな意味作用（メンタリティ、アイデンティティ等）の分析に拡大した。それは「社会運動と学習」研究の観点からは、デケイザー（2002）のいうマクロ（社会）／ミクロ（学習）間の「メゾ運動レベル」での「運動作用」（活性化・教育・ネットワーク）の解明に繋がるとと思われる。それは社会運動

研究において「意識し意味付与をおこなう個人へと研究者の意識を転換させる」(野宮2002) ための方法論を編み出したが、とりわけ次の三つの概念は学習論とも深く関連すると考える。

- ① 「マスターフレーム master frame」: 当該の時期に一つの組織を越えて共有され個々の運動や人々のフレームを根拠付けたり差異化したりする背景的枠組みを「マスターフレーム」というが、これはよりマクロな「運動サイクル」(発生・展開・消滅等)の説明に有効とされる。Snow & Benford (1992) は B. パーンステインを引用し、マスターフレームが「制限コード/精密コード」と同様に解釈・意味づけを方向付けたり制限したりする役割を担うという。これは参加者の社会運動をつうじた学習の動機付けを、所属する組織や環境だけではなく、よりマクロな社会変動と運動の生起に結びつけ解釈するのに有効と思われる。
- ② 「フレーム調節 frame alignment」: フレーム分析において社会運動組織がその活動内容や目標を参加者(潜在的支持者)の価値・関心に適合するよう架橋・補足・拡張・変換することを「フレーム調整」と呼んで重視する。これは運動体が掲げる理念や課題を一様に宣伝するだけでなく、個々の具体的な参加者の身近な生活状況や利害関心との「結びつき」のなかで変形・詳細化するために、さまざまな補足的・拡張的な活動をおこなう。その際「社会運動における学習」は運動理念や状況説明の一方的な伝達だけではなく、むしろ個々人の参加と活動を促し活発化させるための「フレーム調整」のための双方向的なプロセスとみなされる。
- ③ 「フレーム共鳴 frame resonance」: 既述のようにフレーム分析では社会運動体やリーダーが提唱する「理念」だけではなく、参加者が自らの認識枠組みや経験に照らして「合意」することで能動的に参加するという「フレーム共鳴」に着目する。それは状況や問題の解釈図式への同意や価値観への賛同や、実現のための手段や戦術への一致(資源動員論のいうコストも)を含むが、その判断には参加者の経験やレディネスが重要な役割を果たす。この「共鳴」における参加動機や参加形態・関心の推移などの分析は、成人の自己決定的な学習研究の知見と一致するものであると考えられる⁴⁾。

3 『土曜日』グループのフレーム形成と学習課題

3-1 『土曜日』グループの「フレーム分析」にむけて

『土曜日』グループの運動への「フレーム分析」には、それをマクロな状況と直接対決する狭い意味での「政治=思想運動」としてだけでなく、参加者間の相互作用による局所的な権力関係の組み換えと価値創出という「社会=文化運動」に視点を移す必要がある。無論それは「2・26事件」の戒厳令から「盧溝橋事件」にいたる切迫した政治状況や、国内外で取りざたされた「人民戦線フレーム」とも言うべきムード(およびいくつかの新たな試み)と切り離して考えることは不可能である。しかし『土曜日』グループは「ファシズム」が単に暴力的な支配・抑圧だけを意味するのではなく、むしろ積極的に社会・文化面での大衆の「自発的」参加と同意を組織することに意識的であった。

『美・批評』以降の中井らのグループは映画・小説・音楽など大衆文化（特にその集団性や複製技術）のもつ両義性に強い関心を示し、その抑圧的性格とともに新たな「主体」の萌芽も見出していた。多くの参加者が述べるようにそれは当時の非合法共産党における文化運動の「政治への従属」への疑念であると同時に、フランス・スペインの人民戦線運動における大衆の直接参加による文化運動への共鳴を示すものだった。それは日本国内でも（社大党躍進や「文芸復興」ブーム、コミンテルン方針転換など）1936～7年前後の大衆運動内でも微かに共有された、「マスターフレーム」としての大同団結的な「人民戦線」路線とも重なる。だがあえて『土曜日』標語を（仮人民戦線の）「パンと平和と自由」ではなく下に掲げる三つ（および「憩いと憩いの午後」）としたのは弾圧対策だけではなく、「知識人」前衛の連合体から文化を通じた「下からの」大衆参加と確信犯的にこのフレームを「ずらす」意図があったと考えられる。

これまでの研究で（ごく少数の例外を除き）『土曜日』グループの活動をその誌面、それも中井が著した「巻頭言」（その思想的背景）のみにほぼ集約されるかのような記述がなされてきたのは、こうした側面に十分関心が払われなかった証左でもある。実際この時期でさえ「同人雑誌」による読者参加や大衆啓蒙的な試みは必ずしも珍しくはなかったが、①記事における徹底した「日常的話題」から批判的思考を育て、②読者がそうしたテーマについて自らの言葉で「語る」ことを促進し、③読者活動（文化サークル・読者組織）や独自の配布網を通じて「共同的学習」の場を提供する、という「自己教育」的側面に特徴がある。その意味でまたこれは状況から突出した思想同人的「ミニコミ・サークル」の原型としてよりも、むしろローカルな「文化＝政治」状況から無数のたたかいを結ぶための異種混合的な学習の運動の一端として読み直す意味があると思われる⁵⁾。

3-2 『土曜日』標語と記事にみる「反ファシズム」のフレーム

よく知られた『土曜日』の冒頭に毎号掲げられた標語「生活に対する勇気／精神の明晰／隔てなき友愛」は、中井・能勢らが運動を方向付ける「スローガン」を体現するものとして「素直に」読まれる傾向があった。例えば逮捕後の（能勢の供述をもとにした）調書ではこれらはそれぞれ、「現代生活における『人間の意識』を探究」「合理主義的精神の強調」「階級や国境を超えて人類の文化を慕う者が緊密に握り取り合う」といった立場が記されている。そうした線で理解することは誤りではないとしても、「フレーム分析」の立場からはこれらが「ファシズム」状況を（中心的メンバーが）認識し説明するため提示され、それが参加者・読者との関連でどう受け取られ意味づけられたのかが重要になる。すなわち「マスターフレーム」（「人民戦線」や「合理主義」など）との関連・異同や、フレームの「共鳴」や「調整」における認知的側面に焦点を当てることで、個々の参加者の学習プロセスに接近できると考える。ここでは仮説的にこの三つの標語を「フレーム」に重ね合わせてその性格を検討したい：

- ① 〈生活に対する勇気〉と「日常生活批判」フレーム：『土曜日』グループはファシズムへの抵抗点を大局の政治＝社会状況の告発だけでなく、日常生活や文化の領域での「草の

根」的な「同意の組織化」を問題化するとともに、自分たちの「日常生活」を見直すことを課題とした。これは当時の批評・文学で「転向作家」等の「知識人」が「庶民の本当の姿」に急旋回する「生活の発見」（マスターフレーム）と緊張をはらみながら、『土曜日』が（『労働雑誌』『人民文庫』等と同様に）ルポルタージュやリアリズム批評による対抗を試みたものといえる。そこでは消費組合運動での生活課題の学習（物価・税金・流通機構など）と、『美・批評』メンバー（辻部・長広ら）の大衆文化（映画・演劇・音楽・ラジオなど）批評の、経験と人脈の合流によるフレームの「共鳴」と「調整」が見られる。『土曜日』での多数のルポ記事や統計の多様・ニュース的話題などはその意味で、新たなメディア状況での大衆の生活経験を素材にした批判的学習運動を目的にしたといえる。

② 〈精神の明晰〉と「批判的合理精神」フレーム：この標語は明らかに『世界文化』グループの、ファシズムの排外的愛国主義・国家主義の総動員体制に対抗して、批判的理性によって現実を直視する「合理的精神」フレームと共通している。ただ十五年戦争下の不安定な社会状況に対しファシズムの側もむしろ上からの「合理的」社会編成を目指す動きも台頭しており、「教育科学研究会」等も含め）多くの「知識人」がこの体制内「擬似変革」の枠組みに惹かれていた。中井らはこの（目的）合理性のもつ二面性や危険性についてかなり意識的に考察しており、『世界文化』グループでも単純な啓蒙的な理性信仰だけではなく、具体的な文化活動を通じた批判的な思考や大衆（ないし「集団」）の創造的活動に関心を移していた。その意味で新村・久野らはいわば『世界文化』を「フレーム調整」して単に海外の「反ファシズム統一戦線」の紹介ではなく、むしろその下での様々な文化運動や試みを自分たちの文脈に「翻訳」して読者が利用するための「教材」とすることに移行したといえる。

③ 〈隔てなき友愛〉と「多元的連帯」フレーム：この標語は中井らがファシズムを単一価値への同質化の強要だけでなく異質な存在を排除し、同時に大衆社会でのアトム化した個人の「孤独」が背景にあることを踏まえた、対案の提示であると解する。またグループのメンバーの多くが当時の共産党の活動に理解を示しつつ前衛知識人主導・階級一元論・政治優位などに疑問を抱いていたことが回想などで知られているが、その意味では組織論の上でも抵抗主体をそれと異なる多様で開かれた「集団」に求めたものといえる。そこには労働現場や農山村のルポ、海外（特に中国）での民衆のたたかいや生活の報道が数多く含まれているが、この発想（フレーム）は斎藤の『スタジオ通信』から目指し持ち込んだ面が強い。誌上での「読者参加」の記事作りはこうした具体性もち多様な人々のリアルな「声」を互いに知り語ることが肯定されるという意味を持ち、自らの経験を語る／書く方法を知るといふ実験的な学習であったといえる。

このように『土曜日』グループの認識と活動の「フレーミング」は同時代の「マスターフレーム」と交渉しながら中井らが提示したものであり、また参加者たちがこれに「共鳴」しながら経験と見解を持ち込んで「調整」してきたものだと思われる⁶⁾。

4 フレーム共鳴／調整としての学習過程

4-1 『土曜日』誌面における「フレーム」提示

『土曜日』記事内容については中井・能勢の「巻頭言」を中心にいくつもの分析がなされ、とりわけその紙面構成への「読者参加」という特徴には早くから関心が寄せられてきた（荒瀬1979、池田1988、葛西1998等）。それは自然発生的な記事の投稿を促しそれを掲載するといった編集上の技法ではなく、メンバーや読者が自ら書き手・語り手となるための教育的な働きかけの戦略としてとらえ直すことができる。その戦略は『土曜日』を社会運動のメディアとして見るとき、同人雑誌とも大衆啓蒙雑誌とも異なる、「フレーム」の共鳴と調整としての読者の学習を促す役割を果たしていると考えられる。以下では『土曜日』は実際には各面で編集方針や準拠する「フレーム」の比重が顕著に異なる複合的な雑誌であり、それぞれがメンバー・読者の学習を志向していたことを示したい。

- ① 「文化面」・「映画面」と「日常生活批判」フレーム：「文化面」には新村をはじめ『世界文化』グループが深く関わっており、その「世界文化情報」にある仏西の人民戦線の紹介と重なるが、記事紹介は（最終号の「動乱スペインの民衆教育」のように）「文化の家」等その文化運動による大衆教育を紹介するものが多い。それは「理想像」よりも自分たちの反ファシズム運動に活用するためであり、明らかに異なる政治（主体）状況のもとで解釈し再文脈化する作業を伴っている。また日中戦争開戦前後の「準戦時」のナショナリズム高揚に対してはほぼ毎号中国の現状について報告する記事が第一面で掲載された点でも特徴的であり、いわば「もう一つのメディア」たろうとしたことが伺える。

一方「映画面」では大衆的メディアとして台頭してきた映画に一貫して関心を払い、「映画評」にとどまらず観客組織・表現技法を通じて「見る集団（主体）」の形成を強く意識したものとなっている。全般的にそれはドキュメンタリー的な手法や内面を掘り下げる表現を評価し、「民衆教化」や煽動的な映画の批判的に観るといった、メディア・リテラシー的な意図が見て取れる。また『京都スタジオ通信』以来の斎藤による（しばしば争議の場でもあった）映画制作現場の話題（「ロケバス」等）は、メディアの消費だけでなく「集团的芸術」の生産過程にも興味を向け続けた。（なお中井・能勢らは「シネ・フロント京都」として活動してきたが、この時期も疎水沿いの人々の暮らしを映像化した批評的・教育的な記録映画である『疎水』を製作・上映するなどの活動を続けていた。）

他にも「文芸時評」（辻部）や音楽批評（長広）など『美・批評』以来の同人が後述の文化サークル運動と連動する形で活動を続け、また自然科学や経済学等の時事的な記事を掲載し続けたのも、「日常生活批判」フレームを各執筆者が受け返した結果といえよう。

- ② 「婦人面」・「社会面」と「批判的合理精神」フレーム：「婦人面」の特徴としては女性に関わって女性労働のほか家庭生活・子育てや教育問題などを身近な問題を通じた社会や政治に眼を向け、物価・住宅など「婦人」問題の反封建的・反家父長制的見方を育てるといった面が強い。一方でここでも女性たち自身が「書き手」として期待され、前半の堀内カツ子らの連載から後半の盛んなルポ記事の投稿や連載「明日の花束」での応答等によって、

女性自身の誌面作りが強調されている。これは多くの女性が担った消費組合運動の経験から「批判的合理精神」フレームで自ら語りだすという面を示している。

一方「社会面」は編集の能勢の特徴が強く出ており、弁護士時代に培った法律知識をわかりやすく説明する特集や、「社会時評」等経済・政治テーマも含めた話題になっている。具体的な社会問題を批判的に解説する記事が掲載された。それらはファシズムに対して市民権・人権を合理的に対置するという姿勢であり、いわば大衆的な「法律のリテラシー」によって読者が自分たちの権利を見つめ直すことを意図している。また「職場の作文」など読者が自分自身の労働現場での経験をつづった文章が随時掲載され、一種の「生活記録」運動的な学習になっていた。

これらの内容は特に『土曜日』の「批判的合理精神」フレームを具体的に反映した部分であり、日常生活のなかの課題を通じて「下から」ファシズムの組織化に対抗するためのすぐれて教育的な問題提起だったといえよう。

- ③ 「くらぶ面」による「多元的連帯」フレーム：最終面の「くらぶ面」は一見して諷刺的な「時事漫才」や「新篇濫用語辞典」等、笑いも交えながら辛らつに「ファシズム」とは何か考えさせる記事が掲載される。また多くの号に農山村や労働現場のルポルタージュ記事が掲載され、読者が問題を知るだけでなく自ら「報告」し分析する担い手となることが期待され、数多くの投書とあわせて自分たち自身を「知る」学習となっている。特に中国・朝鮮・台湾等の民衆への偏見を問題化し現実を知ることと呼びかける記事も見られ、萌芽的ながら大衆に根ざした民族排外主義に向き合おうとする試みも見られる。総じてここでは「反ファシズム運動」を均質で厳格な「一枚岩」ではなく差異を含み、他の面が「理想論」や規範的になりがちなのに対し、リラックスして読み語ることが許される関係を目指す「多元的連帯」フレームから徐々に形成されてきたものとみることができる⁷⁾。

このように各フレームと誌面は担当者によって密接に関連しながら新たに認識の枠組みとアイデンティティを練り上げ、メンバー・読者＝学習者に投げかけられていったと分析できる。それと同時に「フレーム」相互でも、日常生活批判にルポルタージュの投書を取り入れ、大衆芸術批評を文化サークルと結合し、多元主義的連帯性を異質な他者へも開かれた関係にするなど、相互に「調整」する側面も見られる。

4-2 フレーム拡張としての文化サークル活動の学習

これまで『土曜日』グループのメンバー・読者間での雑誌（誌面）を媒介にした関係のみを取り上げてきたが、その全体像を考えるには雑誌以外の「外部」での様々な（特に京都地域での）活動の全体を見ていく必要がある。その活動については資料・研究蓄積が少ないが、メンバー当事者の回想や警察資料（調書等）・『土曜日』記事等から京都の様々な試みのネットワークを形成しつつあったと推測できる。それはフレーム分析の視点からは中心メンバーから執筆者＝読者集団に投げかけられた「フレーム」が、さらに外部での実践活動の中で学習されることで、二次的に拡張・増幅され再調整されるものと見ることができる。ここでは中井や『土曜

日』のテキスト分析にとどまらない、連動した読者グループの多様な展開のいくつかの側面について若干ふれたい。

- ① 文化サークル活動：『土曜日』は「映画」「文化」面などで映画・演劇・音楽等の最新作品の批評を数多く掲載しているが、実際に京都で鑑賞と批評を目的としたサークルを組織してこの活動と密接に結びついている。内務省資料（『社会運動の状況・昭和十二年版』）等によれば1937年春には「京都映画クラブ」（中井・能勢等、会員三千人・衣笠貞之助や伊丹万作も参加・映画批評の講演会や撮影所見学も）・「京都音楽（文化）クラブ」（長広敏雄等、会員二百人余・演奏会と講演会・座談会等）・「京都演劇クラブ」（新村等、準備）の活動を開始していたという。これは記事でも度々紹介しているフランス人民戦線の成人教育的な活動である「文化の家」の文化サークルなどをモデルにしており、批評だけでなく大衆の作品の批判的リテラシーを養成することを目的にしていた。さらに中井ら『美・批評』グループが目指した大衆文化を集团的に消費／生産する行為を通じた主体の形成という戦略の実験という側面もあり、それが「日常生活批判」のフレームを「大衆文化をつうじた自己教育」に拡張する性格も導いている。またこの一環として能勢らの「シネ・フロント」はこの時期も映画制作活動を続けており、「『土曜日』一周年のピクニック」等ユニークなドキュメンタリー作品を自主制作・上映もおこなっている。
- ② メディア利用と講演等：『土曜日』執筆メンバーは他に『大毎新聞』京都版「カレッヂ・セクション」欄や『大朝』京都版「カクテル」欄や『京都帝大新聞』等学生新聞の記者と密接な繋がりを持ち、ラジオにも中井・新村らが数度出演している。内容的には『土曜日』文化面・映画面等と類似した大衆文化評論が多いが、それは「宣伝」だけでなく座談会・懇談会等を通じ記者・学生等のメディア関係者の協同活動を組織しようとしたものと考えられる。他にも太田梶太らがジャーナリズム批評を展開した『現代新聞批判』や大学人等に支持があった『学生評論』とも（執筆参加を含め）度々交流を重ね、共通の「フレーム」（特に大衆文化を通じた語り）を流用して京都でのローカルな「反ファシズム的文化活動」活動に影響を広げた。これらはメディア関係者と知識人層に対し、『世界文化』の初期目標であった「本当のジャーナリズムと本当のアカデミズム」から連なる、「批判的合理精神」フレームの拡張版と考えられ、当時（また戦後）この活動に触れた若い世代にも強い影響を残した。
- ③ 読者グループの形成：『土曜日』が京都等の喫茶店への配布・販売網で数千部の売り上げをあげたが、これは喫茶店の買上・広告掲載だけでなく読者が持ち帰り・購読したりそこで話題にしたり新たな交流（学習）空間を目指したと推察される。実際、斎藤が経営努力だけでなく「赤の他人である世間の人々が、3銭出して『土曜日』を店で買う」ことを重視し、また店員によるフィードバックを期待したとも記している。また編集者も知らないところで読書会が開かれ、執筆者が投じた「フレーム」の一部分に共鳴して新たな活動が展開されているケースもいくつか知られている。たとえば（のちに「共産主義者団事件」で弾圧された）安賀君子ら大阪・京都の女性グループ「かりがね会」では、『土曜日』婦

人面等を女性問題・労働問題の学習資料に用いたことが知られている。このグループは雑誌『かりがね』で「お互いよりよく生活しようとする熱情を持ち合って此の集りを育てる」（設立趣意書）ことを目標に掲げ、生活課題を通じて資本制・家父長制批判の学習に活用したといわれる。それは「多元的連帯」フレームが示してきた身近な生活課題の相互反省的な学習からネットワークをつなぐ発想とともに、運動内部での異質性や差異に関心を開く可能性を示している。

このように『土曜日』グループの活動は「編集者／執筆者／読者」の雑誌を媒介にした関係を越えて、その内容の多様な「学習活動」を通じて、ローカルなネットワークの自己増殖的な展開を促進する役割を果たしてきたといえよう⁸⁾。

5 小 括

これまで『土曜日』グループの反ファシズム文化運動が提示したフレーミングを、『土曜日』の標語「生活への勇気・精神の明晰・隔てなき友愛」に対応して、「日常生活批判・批判的合理精神・多元的連帯」フレームとして仮説的に弁別してきた。「フレーム分析」の手法はマクロレベルの「ファシズム批判」とミクロレベルの多様な参加者の学習を結びつける、フレームの「調整」や「共鳴」といった動的なプロセスを焦点化する上で有効であると考えられる。今回は紙幅の関係上省略したが『土曜日』の誌面分析や参加者の証言・回想をこの各「フレーム」との折衝から分析することで、より立体的にそこでの学習活動と意識変容の特質を浮き彫りにしうだろう。こうした研究は「社会運動における学習」に関する歴史研究の方法・主題を新たに提供するとともに、すぐれて現在的な「社会＝文化」運動における学習活動を分析する枠組みを構築するのに貢献しうると考える。

（以上）

【参考文献】

復刻版『土曜日』（1974）三一書房

復刻版『思想研究資料特輯第67号日本共産主義者団の研究』（『社会問題資料叢書』第1輯）（1975）東洋文化社

復刻版『内務省警保局編・社会運動の状況10・昭和十三年』、三一書房

中井正一（1962）『美と集団の論理』、中央公論社

荒瀬豊（1979）「読者の弁証法——『土曜日』における実験と実践」、鶴見俊輔・山本明編『抵抗と持続』（世界思想社）所収

L. デケイザー（2002）「社会運動と行動的シチズンシップの学習——フランダース（ベルギー）の事例」、不破和彦編訳『成人教育と市民社会——行動的シチズンシップの可能性』（青木書店）所収

藤田秀雄・大串隆吉（1976）『日本社会教育史』エイデル出版

後藤嘉宏（2005）『中井正一のメディア論』、学文社

平林一（1968）「『美・批評』『世界文化』と『土曜日』——知識人と庶民の抵抗」、同志社大学人文科学研究部編『戦時下抵抗の研究Ⅰ』（みすず書房）所収

池田浩士（1988）「マスメディア状況の言語表現」、富山太佳夫編『講座20世紀の芸術5・言語の冒険』（岩波書店）所収

- 池田浩士・久野収（1985）『ファシズムと大衆文化』、京都大学出版社編『口笛と軍靴——天皇制ファシズムの相貌』（社会評論社）所収
- 犬丸義一（1978）『日本人民戦線運動史』、青木書店
- 伊藤俊也（1978）『幻の「スタジオ通信」へ——かつて無名俳優斎藤雷太郎は最良のジャーナリストであった』、れんが書房新社
- 葛西弘隆（1998）『中井正一と『知』の民主主義——『土曜日』の実践』
- 荻部直（1999）『モダニズムと秩序構想——中井正一をめぐる小考』、井上達夫・嶋津格・松浦好治編『法の臨界Ⅱ・秩序像の転換』（理想社）所収
- 北田暁大（2002）『メディア論的ロマン主義——横光利一と中井正一、メディアの詩学と政治学』、吉見俊哉編著『一九三〇年代のメディアと身体』（青弓社）所収
- 久野収（1998）『久野収集Ⅴ 市民として哲学者として』、岩波書店
- 京都生活協同組合編（1989）『デルタからの出発——生協運動と先覚者能勢克男』、かもがわ出版
- 門奈直樹（2001）『民衆ジャーナリズムの歴史——自由民権から占領下沖繩まで』、講談社
- 長妻三佐雄（2002）『公共性のエトス——三宅雪嶺と在野精神の近代』、世界思想社
- ねずまさし（1976）『プチブルの同人雑誌『世界文化』』
- （1977）『「土曜日」——戦争前夜の娯楽新聞』、『現代と思想』（30）
- 野宮大志郎編著（2002）『社会運動と文化』、ミネルヴァ書房
- 下平尾直史（1999）『「人民文庫」を読む——この時代の『あたりまえ』な困難をめぐる』、長谷川啓編『「転向」の明暗——『昭和十年前後』の文学』（インパクト出版社）所収
- D.A. Snow & R.D. Benford (1992) "Master Frames and Cycles of Protest", in A.D. Morris & C. McClurg Mueller eds., *Frontiers in Social Movement Theory*, Yale University Press
- D.A. Snow et al (1986), "Frame Alignment Process, Micromobilization, and Movement Participation", *American Sociological Review* 51
- 曾良中清司・長谷川公一・町村敬志・樋口直人編著（2004）『社会運動という公共空間——理論と方法のフロンティア』、成文堂
- 住谷悦治・高桑末秀・小倉襄二（1953）『京都地方学生社会運動史』、京都府労働経済研究所発行
- 社会問題資料研究会編（1973）『人民戦線と文化運動』（下川巖著・司法省刑事局『思想研究資料』特輯第77号・復刻版）、東洋文化社
- 高島通敏（1976）『自由とポリティーク——社会科学の転回』、筑摩書房
- 田中秀臣（2001）『沈黙と抵抗——ある知識人の生涯、評伝・住谷悦治』、藤原書店
- 辻部政太郎（1963）『「世界文化」と『土曜日』のころ』、『思想の科学』第17号
- 上野俊哉（1999）『ディアスポラの思考』、筑摩書房
- 渡邊一民（1976）『近代日本の知識人』、筑摩書房
- 渡部徹（1959）『京都地方労働運動史』、三月書房
- 山寄雅子（1999）『文化新聞『土曜日』にみる知識人と大衆の協働——1930年代の反ファシズム文化運動の教育的機能』、『立教大学教育学科研究年報』第42号
- （2002）『京都市人文学園成立をめぐる戦中・戦後の文化運動』、風間書房
- 吉田正純（2003）『生活に対する勇気（前編）～十五年戦争初期・京都の消費生活運動と雑誌『美・批評』集団における「学習」の位置：中井正一たちと〈抵抗の学習〉をめぐる諸問題』（1）、『京都大学生涯教育学・図書館情報学研究』第2号
- （2004）『《精神の明晰》～『世界文化』集団の抵抗と学習：中井正一たちと〈抵抗の学習〉をめぐる諸問題』（2）、『京都大学生涯教育学・図書館情報学研究』第3号
- M.N. Zald (1996) "Culture, Ideology, and strategic framing", in D. McAdam, J.D. McCarthy and M.N. Zald eds., *Comparative Perspectives on Social Movements*, Cambridge University Press

注

- 1) 中井 (1962) 野・武谷・富岡、辻部 (1963)、久野 (1998)、ねず (1977)、京都生活協同組合編 (1989) 能勢。
- 2) 池田・久野 (1985)、伊藤 (1978)、住谷他編 (1953)、平林 (1968)。
- 3) 野宮編 (2002)、曾良中他編 (2004)。
- 4) Snow and Benford (1992), Snow et al (1986), Zald (1996)。
- 5) 犬丸 (1978)、渡部 (1959)、藤田・大串 (1976)、下平尾 (1999)。
- 6) 葛西 (1998)、荏部 (1999)、長妻 (2002)。
- 7) 山崎 (1999)、ねず (1977)、荒瀬 (1979)。
- 8) ねず (1976)、辻部 (1963)、門奈 (2001)、田中 (2001)。